

思考力・判断力・表現力を高める音楽科授業研究の取り組み

1 全国へ発信される音楽科の研究成果

本学校園研究発表協議会も回を重ねるにしたがって、着実に研究成果が蓄積されている。今年度の音楽科担当教員の活動からは、ここ数年の取り組みが本格的なアウトプットの時期に入ってきたことを実感する。まず、ここでは全国に向けた発信として、2つの成果を紹介しておきたい。

(1) 附属小学校・神門洋子教諭による評価の事例

このほど「新評価規準を生かす授業づくり 小学校編3 音楽科・図画工作科」が、ぎょうせいから発刊された。これは国立教育政策研究所「評価規準の作成のための参考資料」に準拠したもので、評価の在り方に焦点を絞って記述された、各教科20～25の授業実践事例が収録されている。このなかに、附属小学校の神門洋子教諭による事例「おはやしの音楽のとくちょうを感じ取って演奏しよう」(小学校第3学年、A器楽)が含まれている。

石見神楽の「大蛇」を扱った内容で、同書では器楽と鑑賞の関連を図った学習を展開する事例として取り上げられた。これは昨年度の本学校園研究発表協議会において、公開された研究授業の一部を再構成したものである。本来、鑑賞を中心としつつも、器楽の活動を有機的に取り入れ、表現と鑑賞の一体化が図られていること、〔共通事項〕を支えとしながら評価の規準を明確化し、子どもの変化を的確にとらえていることが高く評価されている。「石見神楽」が小学校第3学年の新しい教科書に取り上げられたことや、我が国や郷土の伝統的な音楽が重視されていることから、時宜に適った好例である。

(2) 附属中学校・小村聡教諭による歌唱指導についての連載

雑誌『教育音楽 中学・高校版』(音楽之友社)では、附属中学校・小村聡教諭による連載「おむさんの歌唱指導 いそがず あせらず 中1の1年間」が、2011年6月号から始まった。授業における歌唱指導のノウハウやアイデアがわかりやすく書かれており、音楽教育関係者の間でも好評である。

この連載のポイントは、小中連携の要となる中学校第1学年が対象となっているところである。思春期を迎え、心身ともに大きな変化の時期にあたる学年で、歌唱の指導に悩む教員は多い。小村教諭は、豊富な経験からさまざまな問題を提起し、独自の工夫や信念を披露している。まさに、本学校園研究発表協議会がねらいとする小中連携の試金石がちりばめられていると言ってよい。

2011年9月号では歌唱の評価の方法や考え方について言及されている。観点別学習評価に沿った独自の具体的な評価項目や観点を、プリントで生徒に示すことで、生徒が自ら思考力・判断力・表現力を高めることができるよう工夫がなされている。

2 今年度の研究のポイント

今年度は特に「歌唱」を研究のテーマとする。小村教諭の連載からもわかるように、附属学校における歌唱の学習は、合唱も含めて定評があり、歌うことへの児童・生徒の意識は高い。さらに歌唱の学習を質的に高めていくには、〔共通事項〕を軸に、歌う楽曲の特徴やよさをとらえなおし、自分たちの演奏を客観的に分析することがポイントになろう。特に、思考・判断したことを言葉で表し、共に歌う仲間に伝え合うことで、音楽表現の創意工夫を図っていくことを大切にしたい。

昨年度の中学校の研究授業で公開された「声の音色を表す言葉」(2010年10月実施の全校アンケート)は、参観者から大きな反響があった。300をこえる声の音色を形容するボキャブラリーの一覧表は壮観であった。〔共通事項〕の「音色」に焦点を絞った学習が、今年度の歌唱の学習でどのように発展していくかが期待される。その上で、本来、音楽とは言葉を介する必然性を伴わないものでもある。言葉では表現できない音楽的な何かを思考することも、実は音楽の表現に不可欠なはずである。

(共同研究者：島根大学教育学部芸術表現教育講座 藤井 浩基)